過眠症の子供への学校における教員の適切な関わり
―S 市内の教諭・養護教諭へのアンケート調査を中心に―

社会福祉学専攻　石川　由紀

要　旨

日中の耐え難い眠気や情動脱力発作を主症状とするナルコレプシーは過眠症の代表的疾患である.本研究はナルコレプシーを始めとする過眠症の子供に対して、教諭及び養護教諭に求められる適切な関わりについて明らかにすることを目的とした。

そのため 2019 年 6 月から 8 月の期間に S 市内の教諭及び養護教諭を対象に、また 2019 年 10 月から 11 月の期間に当事者及びその保護者を対象に、それぞれ無記名選択式（一部自記式）質問紙式にて調査を実施した。自記部分についてはインターネット上からダウンロードしたフリーソフト「KH　Coder3」を活用し分析を行った。

調査の結果、教諭及び養護教諭の多くは、授業中に居眠りを繰り返す子供について、生活習慣が良くないので改善を勧めたいと考えていることが分かった。過眠症に対する知識としては、代表的疾患であるナルコレプシーについて教諭で 18%以上、養護教諭で 82%以上が「知っている」と回答した。また過眠症の子供が在籍していた経験は全体の 90%以上がないと認識しており、保護者から過眠症であるとの報告を受けた経験もなかった。さらに保護者から過眠症との報告がなく困った経験があると回答した教諭や養護教諭はおらず、疾患であるとの報告がなかった場合は教育活動に困難さを感じることはないことが明らかになった。

過眠症の子供への支援については教諭が学習支援や脱力発作時の転倒防止、行事での配慮が、養護教諭では脱力発作時の安全確保や行事での配慮、周囲への説明、仮眠場所・時間の確保と回答し、教員は学習支援や安全面での配慮を重要視していることが分かった。一方で当事者やその保護者は、教諭には症状への柔軟な対応や学習の遅れへの支援、保護者や本人との面談・相談、他の教諭が理解を深めるための調整役を、養護教諭には仮眠場所や時間の確保、主治医等医療関係者との情報共有、他の教諭が理解を深めるための調整役、症状への柔軟な対応、保護者や本人との面談・相談をそれぞれ求めていることが分かった。

また、教諭及び養護教諭はナルコレプシーの子供への対応について。周囲の子供の理解を得ることや発作時の安全確保、診断の有無による学習支援や症状への対応ということに困難さを感じることが導き出された。

学習支援や過眠症についての情報共有、話し合いの必要性については教諭と当事者及びその保護者の希望が一致していた。しかし教諭及び養護教諭が安全確保や行事での配慮といった事故防止や他の子供との関係性を重視しているのに対して、当事者及びその保護者は教諭に対しては症状への柔軟な対応や他の教員との関係性を、養護教諭に対しては具体的な症状への対応や医療機関との連携といった病気や症状についての専門的な関わりを求めている部分で両者に差が生じていることが明らかになった。

以上のことからナルコレプシーを始めとする過眠症の子供に対して、教諭や養護教諭には、まず過眠症に対する知識の習得と異常な睡眠についてのアセスメントを行い、当事者である子供と保護者の考えを取り入れた支援体勢の構築を行うこと、そのために必要な支援

の実施や平等についての教員間の意思統一を行い関わることが求められていることが示唆された。

職種別では、教諭については健康観察による異常な睡眠を発見することや当事者である子供や保護者との関係づくり、学級・学年の子供たちや授業担当者との調整といった関わりが必要であると考えられた。また養護教諭については、健康観察を適切に行うためのポイントの周知や最新の医療的知識を習得し他の教員に伝えることによる異常の早期発見やアセスメントを行うことが第一に求められた。さらに医療的側面や休養等の身体的支援について当事者である子供や保護者と教員、医療関係者との調整を図るという専門的な関わりが必要であることが導き出された。

課題として、同じ時間に同じ行動をとることが求められることが多い学校現場において、個別の症状に対する柔軟な対応を行う経験が少ない学校風土や、それを当たり前としてきた教員の育ちが、過眠症の子供への適切な関わりが推進されにくい要因として考えられた。また世界的に見て最も短い日本の睡眠事情が、睡眠と健康の重要性や睡眠障害についての知識の普及を阻害していることも課題の一つであると考えられた。